

政治研究結果報告書

— 政治研究助成 —

西暦 2025 年（令和 7 年） 2 月 10 日

一般財団法人 櫻田 會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者名 高橋 徹

大学名・職位 中央大学・教授

第 42 回（令和 5 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

ニュースの現実構成に関するメディア史的研究
A Media Historical Study of Reality Construction of News

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

Taking into account recent structural changes in news distribution and reception, this study considered the contemporary conditions of journalism in a media environment where various algorithms are at work. First, this study conducted a case study of algorithmic processing introduced into the editorial process of Reuters. Furthermore, to explore the inherent logic that defines journalism's autonomy, this study investigated norms established by domestic media organizations and the American journalist association and the logic of autonomy formulated by academic journalism researchers. Based on these, this study found that the core elements of journalism's autonomy are the combination of the functions of serving the public interest and social synchronization of information and their crystallization into its professional identity. This study also pointed out that the decline in journalists' control over news distribution and reception increases the importance of serving public interest and the public's trust in their reports. Finally, this study argues that these changes and circumstances will provide opportunities for a variety of alternative journalism practitioners.

※研究の目的・研究方法・意義（日本文 600 字以内）

政治報道をはじめとしたジャーナリズムによるニュース報道は、現在に至るまで世論形成の中心的な契機の一つであり続けているが、本研究では伝統的なマスメディアを中心と

した 20 世紀型のメディア環境からインターネット上のプロゴスフィアの発達によって生じたニュース流通・受容の歴史的構造的変化を捉えるとともに、ジャーナリズムの実務へのアルゴリズムの導入に関するケーススタディ、ジャーナリズムの自律性に関する理論的考察を行うことで各種のアルゴリズムが作用する現代的メディアコミュニケーション環境がジャーナリズムに対してもたらす諸帰結を明らかにする。

※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

本研究では、まず近年の AI 技術の急速な発達に鑑みて、ジャーナリズムの実務に対するアルゴリズム的処理の導入に焦点をあて、そのケーススタディを行った。具体的には、ロイター通信の業務に導入された、ソーシャルメディア上からのニュースピック検出システムの設計思想について調査し、そのロジックがジャーナリズムの内在的な自律性においてどのような位置づけを与えられ、かつどのような問題性をはらむのかについて考察した。その成果は、本研究の中間報告として 2024 年 6 月にポーランド・クラクフ市において開催された国際社会学会の専門下部組織によるカンファレンスにおいて発表した。

続いて、ジャーナリズムの自律性を規定する内在的なロジックを探るために、国内外の報道機関、ジャーナリストのアソシエーションによって制定された規範集を調査するとともに、ジャーナリズムの学術的研究者が定式化した自律性のロジックを参照した。それらをふまえ、当事者および研究者の双方の視点から指摘される公益性への奉仕と情報の社会的同期化という機能の結合、その職業的アイデンティティへの結晶化に、ジャーナリズムの自律性の核心的なメルクマールをみいだした。

他方で、メディア環境の歴史的な転換期にある現在、ジャーナリズムによる公益性への奉仕と情報の社会的同期化という中核的な機能の充足は、独占的なメディアアクセスを背景とした強力な発信力に寄りかかったままでは実現しえないことが明らかとなっている。例えば、ジャーナリスト以外の人々の情報発信力の増大、またネットユーザーによる情報の 2 次的媒介、さらには各種インターネットサービスの随所に浸透しているアルゴリズムによる選択的情報接触の高まりが、情報の流通・接触の次元におけるジャーナリストの統御力を弱体化させているからである。そのため、ジャーナリズムにとって公益性のある情報の信頼性のある発信源としての役割を担うことの重要性が以前にも増して高まることが明らかになった。

ニュース報道を介した社会的現実の構成は、以上のような条件のもと、報道の範疇に入らない偶発的な情報拡散に包囲された状況において行われてゆくことになる。また、ジャーナリズムの職業的アイデンティティが、巨大な発信力にではなく、公益性と信頼性を備えた情報発信者であることに立脚することで、従来型の組織ジャーナリズムに集約されないかたちでジャーナリズムのオルタナティブな実践が展開される条件が形成されつつある。

本研究でえられた以上の知見は、今後とりまとめを行い、論文形式で発表する計画である。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

2024年6月：“Journalistic Autonomy in an Algorithm-Driven Society: A Sociocybernetic Consideration”
，18th International Conference of Sociocybernetics, Krakow, Poland(学会発表・国際社会学会)
2025年度中：「アルゴリズム時代におけるジャーナリズムの自律性—社会システム論の視点から」
『法学新報』132巻3・4号、中央大学法学会(論文)

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。